

vol. 8  
2009  
Spring & Summer

ハート  
ええじゃないか  
友の会





副院長  
**大川育秀**  
おお かわ やす ひで



理事  
**白川洋之**  
しら かわ ひろ ゆき



院長・理事長  
**鈴木孝彦**  
すず き たか ひこ

# 豊橋ハートセンター 開院10周年記念 特別インタビュー

◎ インタビュアー ◎ ハートええじゃないか友の会会長

作家 **宗田 理**  
そう だ おさむ

1999(平成11)年に産声を上げた豊橋ハートセンターは、今年の5月に開院10周年を迎えます。いかにして誕生し、いかにして世界に名だたる循環器専門病院として発展していったのでしょうか。開院当時のエピソードや今後のハートセンターについてインタビューしました。





## 理想の医療を実現するために

宗田「開院10周年おめでとうございます。僕がはじめてこちらの病院でお世話になったのは4年前ですから、開院当時のことはもちろん詳しく知りませんが、先生たちがどういう想いでこの豊橋ハートセンターを立ち上げたのか、ということには非常に興味をひかれます。そこでまず、鈴木先生、大川先生が豊橋東病院にいらっしやっった頃のことからお聞きしたいのですが、当時の豊橋東病院の循環器と言えは全国でも有名でしたよね」

白川「院長、副院長が外来をやっている時には一日200人以上の患者様がいらしてました。予約制ではなかったものですから、朝の5時頃から並んで待って下さっているような状況でしたね」

宗田「そんな中で、新しい病院を作ろうと思ったのはなぜだったんですか？」

大川「一つには国立病院の統廃合により、豊橋東病院の循環器が縮小されてしまうという問題がありました。縮小されてしまえば医師やスタッフの定員も減りますし、それまで患者様へ提供できていた医療ができなくなってしまうです」

鈴木「豊橋東病院は単体では大きな黒字を出していましたが、国にとってみれば、個々の国立病院の採算がどうなっているかということなど、関係ないんですね。どんなに利益を出したところで、あらかじめ決められた予算組みに従って、大きな病院から割り振られていってしまうのです。これではいくらスタッフが頑張っても報われません。それから、もう一つには構造的な限界があります。例えば、循環器は夜中にいつ患者様が運ばれてくるかわかりません。国や自治体が24時間365日の受け入れ態勢をとってきちんと

対応できるでしょうか。これでは患者様のための医療はできないと思いました」

## 診療所からのスタート

宗田「それから、豊橋ハートセンターを開院するわけですが、けれども、立ち上げる際にはいろいろな苦労があったんじゃないでしょうか」

鈴木「最初に苦労したのは病床の確保です。当時の東三河医療圏の病床数はすでに過剰となっていました。我々としては何とか50〜100床を確保してスタートしたかったのですが、開院時にはかなわず、19床の診療所としてオープンすることになりました」

白川「当初は、一定数のベッドがないと高い医療レベルが保てないのではないかと思っていたのですが、日帰りのカテーテル検査や一泊二日のPCI（経皮的冠動脈形成術）、MID-CAB（人工心臓を使用せずにバイパスを行う手術術式）など、当院のドクターが得意とする患者様への負担が少ない手術や治療は、入院期間を短く済ませることが出来ます。であれば、19床でもある程度のことではできるんじゃないかということでも踏み切りました」

宗田「病院は最初から今の規模で建てたのですか」

白川「いえ、3分の1の大きさでした。エレベーターから東側です」

宗田「68床にしたのはいつですか」

白川「段階的に30床入って、2年半後に増築して68床になりました」

宗田「今後増やしていく予定はないのですか」

鈴木「ないです。身の丈にあったというのが一番いいですね」



## 奇跡的な誕生

宗田「この病院には特定のオーナーがいませんね。これだけの病院ですから設立にあたっては、当然銀行からの融資が必要になると思いますが、その辺りはどうされたんでしょうか」

白川「計画書を作ってお願いしに行っただんですが、大きな銀行には相手にされませんでした。こんなうまい話はないって(笑)」

宗田「そうでしょうね。それからどうしたんですか」

白川「蒲郡信用金庫の当時の副理事長さんが、豊橋東病院まで院長の外来を見に行かれまして、心臓の悪い患者様が狭い廊下に列を成して診察の順番を待っているのではないかと。それから、院長の人柄や地域に根差すという理念にも惚れこんでくださいますして、融資しようじゃないかということになりました」

宗田「大英断ですね。奇跡的な誕生という感じがしますよ」

白川「他の病院の先生方からもこういう病院を作りたいと、いくつか相談を受けたこともあるのですが、やはり融資のところでもつまづいてしまうパターンが多いようです」

宗田「担保はあるんですか」

鈴木「この土地と建物と僕の生命保険です」

宗田「生命保険？」

鈴木「それだけの覚悟を決めて始めたんですよ」

## 開院初日の象徴的な朝

宗田「そして、遂に開院ということになるんですが、初日はどんな様子だったんですか」

鈴木「僕が当直をやりましてね、朝3時から玄関に出ました。豊橋東病院の時は、3時か4時頃にはポツポツと患者様が来られていたので。さすがにその日はまだ





開院当時の豊橋ハートセンター



誰もいらつしやらなかったのですが、4時になって救急車から電話がかかってきました。僕一人しか病院にいなかったの、あわててみんなを呼びましたよ。最初の患者様が心筋梗塞なんてね、びっくりしました」

**宗田**「開院日ってことを知ってたんですね」

**鈴木**「そのくらいこの地区には浸透してたようですね」

**白川**「おそらく当日は、大勢の患者様がおみえになるだろうということ、前日の時点で、朝6時45分、院長の「おはようございます」の一言で開院するぞ、というスケジュールになっていたわけです。ところが5時に急性心筋梗塞の患者様が入られました。治療が長引いたら待ち時間が増えるだろうかと心配しておったのですが、予定時刻までにはすっかり終わりました。院長に挨拶してもらい、何事もなかったかのよう

に外来が始まりましたね」

**宗田**「実際、大勢来たのですか」

**白川**「約300人です。大混乱でした」

**鈴木**「グチャグチャ。大川先生なんて、何書いてあるかわからなかったね(笑)」

**大川**「困ったのは薬ですね。豊橋東病院の医事課に「誰誰さんのをすぐFAXして」って連絡して。ずいぶんお世話になりました。そんな状態が一年ぐらい続きました」

## 民間の力による 単科病院として成功を納める

**宗田**「その当時は、心臓専門の病院はまだ少なかったんですね」

**鈴木**「それなりにありましたけど、民間でやるというケースが少ないんです。まして、単科でやるというのは本当に全国数病院です」

**宗田**「新しく作る、なんてことはなかったんですね」

**鈴木**「費用がかかりますからね。循環器専門病院となる

と、カテーテルの機械にしても何にしても、軽くちょっと、という感じでやるわけにはいきませんから」

**宗田**「カテーテルの技術は、この10年の間にかなり進歩してきているんですか」

**鈴木**「相当進歩しています」

**大川**「カテーテルの治療器具も外科の機械も、毎年毎年新しいものが出てきます。技術と同時に機械もどんどん進歩していますね」

**宗田**「随時、新しい機械に入れ替えていくっていうのは、よっぽど黒字を出さないとできないでしょうね」

**鈴木**「最小の投資と最小の頭数で最大の力を発揮する。これは民間だからできるんですね。先ほども申し上げたように、国公立病院ではこの点においても限界があります」

**宗田**「日本の国公立病院は赤字経営のところが多いたるところが非常に多いと聞きますが、どうしてなんですか」

**白川**「一つには人件費の高騰というのがあると思います。看護補助のスタッフでも勤続年数が長ければ医師と給料が同じ、ということもあります。病院で稼いでくれるのはドクターです。ドクターが集まらない病院は必然的に苦しくなりますね」

**鈴木**「あと日本の場合、一生懸命働いて稼ぐドクターも、稼がないドクターも給料が一緒です。ここも大きな問題です」

**大川**「それと投資効率の悪さがあります。一般企業であればお金を投資した部門は24時間稼働させた方がいいに決まっています。4時までしかダメとか、夜中はスタッフがいないからという理由で手術をやれる時間帯が限られています。それでいて償却期間が過ぎたら、いくら使っていくらというまいと次の新しい機械に更新されてしまう」

**鈴木**「国公立病院がこんなことをやっていたら、医療費は



いくらあっても足りませんね」

## 一流のドクターやスタッフが集まる病院

宗田「開院時のメンバーはどういうふう募ったんですか。院長先生が声をかけたんですか」

大川「院長から一緒にやろうと言われた人は誰もいないと思います。みんな、やるのが当たり前というか自然な形でついていきました」

宗田「それから10年の間に、ハートセンターには世界的にも有名なドクターがたくさん来られています。優れた先生やスタッフはどうやって集めてこられたんですか」

鈴木「ドクターはみんな自分から来てくれますね。決して集めようとして集まるものではありません」

白川「院長が理想とし実践している「患者様のための医療」、これに賛同してくれるドクターが来てくれます。それとあわせて、院長の人望や職場環境による部分もありますね」

鈴木「やはり、ドクターが働きやすい環境を作ることが大事です。基本的には本人を尊重した自由放任主義です。一方で、ドクターが最高の技術を磨けるよう、スタッフのトレーニングは徹底的にやっています。スタッフのレベルが低いとストレスがたまるばかりで治療が進みませんので」

宗田「加藤先生、土金先生、朝倉先生など、院内で姿を見かけることが珍しいほど、世界や日本中を行脚されているスーパードクターもいますね」

鈴木「詰まった血管を再生する」という医療においては、豊橋ハートセンターが世界でダントツです。他に追随するところはありません。ということ、誰も手が出せないような難易度の高い症例や失敗してしまった症例について、最高の技術で治療してほしいとい



土金先生



加藤先生(一番右)

う要請が世界中から舞い込みます。彼らはそれらを受けて各地を飛び回っているのです」

白川「また豊橋ハートセンターのスーパードクターは、患者様を治療するということだけでなく、現地の医師に対してカテーテルの技術を教育するという役目も担っています」

宗田「そんな国際的に意義のあることを地方の一病院がやっているなんて思いもありませんよ。素晴らしいことです」

鈴木「こういうことができる病院というのは全国どこにもないでしょうし、世界でも例がありません」

## 院長も日々成長 教育への情熱

宗田「ハートセンターの将来を考えると、若いドクターたちへの教育は重要だと思っておりますが、こちらにもかなり力をいれていますね」

鈴木「院長一人だけが『神の手』になってしまっている病院は全国にも数多くあります。それでは後進が育ちません。当院では海外から学びに来ているドクターも含めて、若い人には積極的に実践してもらっています。豊橋ハートセンターには『神の手』以上のドクターが幾人もいるということです。こうした病院は日本にも世界にも類をみません」

宗田「具体的にはどのように教育するのですか」

鈴木「まずは助手をしてカテーテルに慣れてもらうことです。それから、診断カテーテルをして徐々に徐々に、という順序です。一番大事なのは、とにかく経験を積むことです」

宗田「その時に上手か下手かというのも大体わかるんですか」

鈴木「実は上手すぎてもよくないんです。経験が浅いまま、自分勝手にどんどん進んで行ってしまうと合併





鈴木院長(右)

症を引き起こす恐れがあります。我々は患者様の命をお預かりしているわけですから、慎重にやらなくてはなりません。そのためには、経験を積むことと同じ時に他の人の手技をしっかりと見て、自分自身を冷静に見直すことも大切です」

**宗田**「何年ぐらい経験を積めば良いのでしょうか」

**鈴木**「10年より20年、20年より30年、それはキリがありません。僕自身にとっても、若いドクターの手技を見ることはとても勉強になっています。人それぞれ絵の描き方が違うように、その人の個性から教えられることはたくさんあります。そうして僕もまたステップ・アップしていけるんですね。お山の大将になっていては技術だけでなく、人間的にも成長できません」

**白川**「若いドクターには、院長や副院長、ベテラン医師から技術だけでなく外来や接し方についても学んでほしいですね。患者様に不快感を抱かせたり、嫌な思いをさせてしまったら、どんなにいい医療をしていてもそこで終わってしまいます。信頼関係を築かなくてはいいけません」

## 賢い患者になって強い信頼関係を

**宗田**「そういう意味では、この病院はホスピタリティがあふれているというか、とても温かい印象がありますね」

**白川**「職員全員を対象に年に数回、元キャビン・アテンダントによる接遇講習を行っています。病院は患者様の心も癒す場所ではなくてはなりません」

**大川**「ドクター、ナースから事務員、清掃スタッフまで、みんなが患者様に尽くすという姿勢を徹底しています」

**鈴木**「患者様にとっての一番とは何かというのを常に考えています。技術もそう、接遇もそう、救急を断らないというのもそうですが、コストパフォーマンスについても気を配っています。手術や治療にかかる時間や身体への負担、患者様にかかる金銭的費用も最小限にして、なおかつ術後の出来も最高のものにするということなんです」

**宗田**「より良い医療、サービスを受けるためには、患者の側も努力しなくてはいいけませんね。自分の症状を的確に伝えるにはどうしたらいいのか、ドクターに間違ったことを伝えていないか。賢い患者になってドクターと強い信頼関係を築くことは、自分自身が将来健康であるための近道だと思えます」

## ハートセンターグループの今後

**宗田**「昨年10月に名古屋、今年2月に岐阜と開院し、豊橋がここに10周年を迎えました。今後はグループとしてますます発展していくことと思いますが、理想としてはどういう形にしていきたいものなのでしょうか」

**鈴木**「名古屋と岐阜については、豊橋と同じレベルまであげることが近々の目標ですが、グループとしては、3つの病院それぞれがその地域で認められて、患者様に愛される病院になるということですね」

**宗田**「実際にそういう病院は少ないんですね」

**鈴木**「患者様のための医療と言うと当たり前のようにですが、当たり前前のができていない病院がほとんどなんです。まずは我々と患者様との間にある溝をできる限り埋めていくことをしなくてはいいけません。一般的な病院への評価は後からついてくるものです。地域に根ざし、周辺の住民の方から「いい病院だね」と認められること、これが本来の病院の姿だと思っています」

**宗田**「理想の病院めざして頑張ってください。ありがとうございます」





# STAFF

## 豊橋ハートセンター スタッフ紹介

いつでも 気軽に  
お声をかけてください!



おくのきみか  
**奥野君佳さん**

豊橋ハートセンター 看護師

1972(昭和47)年、浜北市(現・浜松市)に生まれた奥野さん。幼少の頃に両親の勧めでガールスカウトに入団し病院や福祉施設で行われるボランティア活動に参加。その時の体験で医療や福祉に興味をもちはじめ、高校生の時、迷うことなく看護師の道に進もうと決意する。看護専門学校を卒業し、豊橋の病院へ勤めた後、国立豊橋東病院で循環器科のプロフェッショナルと出会う。「そこで真剣に看護に取り組み先輩方は、みなさんプロ意識の塊で、とても格好良かった。そんな方達と同じチームで仕事に臨める事に心から喜びを感じました」。

平成11年、豊橋ハートセンターが設立されると、その理念に賛同した奥野さんも開院メンバーの一人として参加する。「鈴木院長を始め、院内で働くすべてのスタッフの気持ち、患者様のためにより良い医療を目指して頑張る、という一点に向っていました。その姿勢は病院設立から10年経った現在でも変わりません。私も誇りを持って仕事に臨んでいます」。

看護師の仕事はライフワークだと断言する奥野さん。「看護師の役割は、患者様の身体的苦痛と精神的苦痛、両方を軽減できるように関わる事だと思います。不安な思いを抱えていても、それを口に出して言えない患者様が圧倒的に多いので、少しでも心の苦痛“も取り除いてあげられる様に努力しています。私達スタッフには身内のように何でも語りかけてもらえれば嬉しく思います」



のしばしの  
**野芝志乃さん**

豊橋ハートセンター 看護師

1968(昭和43)年、豊橋市に生まれた野芝さん。国立豊橋東病院のカテ・オペ室に7年、循環器内科病棟に1年、重症心身障害(小児)病棟に2年、豊橋ハートセンターが10年目と、看護実績19年のベテラン看護師だ。当院では主にオペ・カテ室で仕事をしている。

「私は研修生の頃から手術室を専門とする看護師になりたいと思っていました。常に緊張の伴う手術室内での仕事には、特別な技術ももちろん必要ですが、それ以上に患者様への心の配慮が求められます。手術台の上で不安に満ちた患者様の気持ちを、少しでも和らげてあげられるよう努める事が、私の最大の役割です」。術前は誰もが不安や緊張に苛まれるが、その様な感情は隠すことなく積極的に表に出して欲しい、と野芝さんは言う。

豊橋ハートセンターが、開院以来10年間欠かさず行っている習慣の一つに術前の「元気パワーの受け渡し」というものがある。「手術室に入室する直前、患者様とご家族の皆様には、必ず手と手を取り合ってもらっています。恥ずかしがる方々も多いのですが、私達スタッフは「元気パワーをもらいましょう」と積極的にスキンシップをはかるよう促します。この行為は、術前の患者様から不安感を取り除くだけでなく、ご家族の方々にも手術の大変さを理解していただく上で、とても重要なのです。なによりも、患者様方の強張った表情に少しでも安堵が見られると、私自身この上ない喜びを感じます」。野芝さんが仕事をしていて最も好きな瞬間でもある。



# MEMBER

## 会員のご紹介

### 命の恩人・ 鈴木院長との 運命的な出会い

すずき ござろう  
鈴木伍郎さん



1930(昭和5)年豊橋生まれの鈴木さん。幼少の頃に両親を亡くし、以来苦勞の連続であった。太平洋戦争が始まると、市内にあった陸・海軍の飛行場へ木材を運び込むという重労働の毎日を経験する。この時の体験によって、元々あまり丈夫ではなかった身体を壊してしまう。

戦後は職もなく、身体を酷使しながら農業で生計を立てていた。そんな折、知人に神職の道を目指す事を勧められ、19歳の時、東京で神主の資格を取得。神職は鈴木さんの天職となり、幸運な出会いを引き寄せるきっかけとなった。勤務先である羽田八幡宮で祭儀や社務を行っている時、ときおり境内を走り回っている元気な子供を見かけるようになる。その子供こそ、のちの豊橋ハートセンター・鈴木孝彦院長であった。「鈴木先生のご実家が神社の近くにありましたので、よく境内で遊んでいる姿を見かけました。当時からとても人当たりが良く、活発で聡明なお子さんでしたよ。今思えば運命的な出会いだったのかもしれないね」。

鈴木さんは平成2年に心筋梗塞で倒れ、豊橋東病院へ救急搬送される。「その後も平成11年、19年と重篤な弁膜症を患いましたが、いずれも鈴木先生とハートセンターに命を救っていただきました。外来で病院を訪れると、先生を始め、スタッフの方々がまるで家族のように温かく接して下さい、その度に安らぎを感じます。おかげ様で今ではすっかり元気になりました。10周年を迎えた豊橋ハートセンターの、益々の繁栄を心よりお祈り申し上げます」

### 『患者第一の医療』を実践する 鈴木院長の人柄に心酔!

ひびのしげたか  
日比野重隆さん



1924(大正13)年、豊橋市生まれの日比野さん。現在、市内で営む花屋のあさひ生花店は、終戦直後に開業し、今年で創業64年を迎える老舗である。日比野さんは高等小学校を卒業後、当時熱田にあった名古屋愛知時計株式会社に14歳で入社。艦砲射撃用の射撃盤を作る仕事に就いた。戦争が佳境に入ると、海軍航空隊の整備科へ徴兵される。「配属された福島県の小名浜は、海軍の特攻基地でした。ですが乗船直前に終戦を迎えて、命を取り留めました。運が良かったのでしょうか」。

戦争が終わって帰郷すると、両親からもらった3円を資本金にして花屋を始める。数年間は全く軌道に乗らず、苦勞の連続であったが、真面目な仕事ぶりが評判を呼び、商売は徐々に上向きに。その後は温かな家庭にも恵まれ、つつがなく日々を過ごしていた。

だが、70歳を迎えたある日、心筋梗塞を発症して豊橋東病院へ搬送される。「もう駄目かもしれないと思いましたが、鈴木先生の献身的な治療によって命を救われました。以来少しでも身体に変調を覚えると、すぐさま相談に行きます。心臓に関係のない病気に関しても、嫌な顔一つせず快く話を聞いて下さるので、本当に有難いです。6年前に鈴木先生の診断のおかげで、早期に直腸ガンが見つかり、再び命を助けていただきました。私は先生のおっしゃる『患者第一の医療』を心底実感しています。これからも安心して先生とハートセンターについて行こうと思っています」



## ハートセンターは丈夫なヘルメットでも、事故を防ぐのは自分自身で!

いせきよしろう  
井関吉郎さん



1937(昭和12)年、大阪生まれの井関さんは、豊橋市で主にクリスマス用品を取り扱う貿易会社を経営している。サンタクロースの人形や、お菓子を入れるブーツなど、商品の総数はゆうに100種を超える。御年72歳の現在でも、平均月2回の海外出張、1年の4分の1を外国で過ごすというバリバリのビジネスマンだ。井関さんは大学で法学を学んだ後、輸出業を開始するが、ニクソンショックを機に輸入業へ転換。現在は上海や香港を拠点にビジネスを展開している。

そんな井関さんを病が襲ったのは、今から14年前。かかり付けの医師を訪ねると、当時豊橋東病院に勤めていた鈴木院長を紹介される。「すぐにカテーテル検査と治療を受けたので、大事には至りませんでした。鈴木先生にはその後で随分と脅されました(笑)。タバコは駄目、キャベツと豆腐中心の食事をして、減量しなければ命の保障は出来ません、と言い切られました」。院長の遠慮の無い物言いに始めは戸惑った井関さんであったが、正直かつ丁寧に行われる医療にいつしか信頼感を寄せるようになった。

「3ヶ月に1度、先生の診察を受ける度に、健康の大切さを再認識しています。ハートセンターの治療が優れているのは、オートバイや自転車のヘルメットと同じ。いくら丈夫なヘルメットを被っていても、日頃の心掛けがよくなければ事故は防げないのです。人生の安全運転に必要な鈴木三原則“禁煙・運動・食事”を遵守しながら、今後も益々仕事に精を出していこうと思っております」

## 奇跡の大手術 親子2代で救われた命

すぎたこ  
杉田たつ子さん



1938(昭和13)年、渥美に生まれた杉田さん。幼少の頃から実家が営む農業を手伝い始め、71歳を迎えた現在も、夏はメロン、冬はトマトと、渥美半島特産の果物や野菜を栽培している。昔から体を動かす事が大好きだった杉田さんの体調に変化が現れたのは40代の半ば頃。少しダルさを感じる程度だったので、その時は気にも留めなかった。

ところがそれから数年の間に、母と姉を心筋梗塞、兄を弁膜症で亡くし、杉田さんの体調も目に見えて悪化していった。酷い日は寢床から立ち上がることも出来ない。杉田さんは恐る恐る豊橋ハートセンターを訪ねた。診断結果は、大動脈瘤と弁膜症の合併。緊急の手術が必要であった。手術は8時間を要する大手術となったが、結果は大成功。執刀を担当した大川副院長も「今まで診た同ケースの病状の中でも、上から2番目位に重症だった。手術が上手く行って本当によかった!」と大喜びであった。

しかし喜びも束の間、今度は杉田さんの娘さんが倒れてしまった。驚いた事に、病状は杉田さんと全く同じものであった。その時も執刀医は大川副院長。手術に要した時間も同じく8時間。そして手術も再び大成功に終わった。「大川先生は私と娘に奇跡をくれました。私たちが現在元気でいられるのは、すべて先生のお陰です。スタッフの方々もとても優しく接してくれますので、外来で訪れるたびに心の安らぎを感じます。先生とハートセンターには感謝してもしきれません」



# 胸がどきどきする話 第八回

## 異国の地での一発勝負！

### ドキドキは白星への架け橋

豊橋ハートセンター 循環器内科部長

つちかねえつお  
土金悦夫



現在、私は鈴木院長の特別な計らいで豊橋の外の病院にてカテーテル治療に携わる事が多く、特にここ数年は、症例の半数以上を海外の病院で施行させて頂いている。このような環境は、私自身の貴重な経験になっている事は勿論、海外医療界への貢献は絶大で、改めて院長の懐の深さには畏れ入る。

私が治療するのは心臓冠動脈の慢性完全閉塞病変で、心筋梗塞後や狭心症の時見られる。完全閉塞なので、血管を広げる以前にまずワイヤーという針金を通す技術が要求される。逆に言うと針金が「通る、通らない」で手術の成否が決まるので、相撲同様「白黒」が一目瞭然。しかも「敗者復活」は無く、同じ症例に再挑戦は不可。一発勝負である。当然医療であるので、それ相応の勝率が要求される。いわゆる横綱のように白星を重ねなければならぬ。もし勝率を落とせば即降格。私の場合は院長に「院内軟禁」か？

私の「ドキドキ」は異国の地の朝、ホテルで始ま

る。さすがに小学生の愚娘とは違い、イベントの前

の晩からドキドキはしない(まあ夜はその日の勝利の美酒に酔っているだけなのだ)。しかし一夜明ければ昨日の白星はもう過去のもの。今日の白星を誰も保障してくれない。全て自身の裁量次第。「今日は大丈夫か?」「今日も何とかなるはず」。自問自答の繰り返しは、病院に向かう車中まで続く。

特に「ドキドキ」が増幅するのは、未訪問の病院に行く時。初めての手術室とスタッフの中、(しかも英語で!)白星をあげられるのか?「もうこのまま帰りたい」と感じる事もしばしば。しかし、車を降り病院に入った瞬間、不思議とドキドキしなくなる。「まな板の鯉」?いや「土俵の横綱」か?かの朝青龍も異国の地の支度部屋ではドキドキしてはる。そう思うと土俵上の彼は可愛らしく頼もしい。思つに「ドキドキ」は白星への架け橋である。

さて次の異国はモンゴルの隣りの中国。「豊橋」のマワシを付け土俵に上がる。また美酒に浸りたいものだ。

## 今号の

## おすすめ本

### 病院・医者と

### 賢くつきあうために 知っておきたい最低限のふと

医療を過信し、病院・医師は病気をすべて治せるはず、と思いきものは最大の誤解である。賢い患者になるための「患者力」を身につけなくては、楽しく健康な一生は送れない。そのための心構えとして、

- ・伝えたいことはメモして準備
- ・病院側とよりよい人間関係を築く
- ・自覚症状と病歴は大切な情報なので必ず伝える
- ・これからの見通しを聞く
- ・その後の変化も伝える努力を
- ・納得できないことは何度でも質問を
- ・治療方法を決めるのはあなた自身

などを上げている。医療担当記者を長年勤めてきた著者ならではの情報力で、患者にとって役立つ知識がたっぷりつめこまれている。



かしい患者力  
よい病院と医者選び 11の心得

田辺 功

[西村書店]

定価 1000円(税込)



# ええじゃないか 生きていれば

## 第四回

京田 賢哉

### 賢い患者になろう

病気になって行くのが病院。  
足取りも重くなり、  
いい気分で向かう人は誰もいない。  
それからほどなくして、  
患者は文字通り心を串刺しにされる。  
まったくいい気分のわけがない。  
どうせ串刺しにされるのなら、  
いい病院にかかって  
いい医療を受けたいとみんな思う。  
ではどうしたらいいのだろうか。  
たくさんの本を調べて、  
医療レベルが高く  
親切な対応をしてくれる病院を探す？  
探すことだけ一生懸命やって、  
あとは医師任せにしとけば  
大丈夫というものでもない。  
患者がしっかりした知識を持って、  
医師との共同作業で  
病気に立ちむかうことをしなければ、  
決していい医療は受けられない。  
そのためには、医師との間に  
よい信頼関係を築くことが大切だ。  
まず、挨拶やコミュニケーションを  
積極的にとろう。  
それから、自覚症状などを  
正直に正確に伝えよう。  
間違った情報を与えてしまえば、  
どんな名医だって判断を誤るものだ。  
大事なことはメモを取って、  
疑問に思ったことは何でも質問する。  
こんなことを訊いたら怒られるんじゃないか、バカにされるんじゃないかなどと思っては絶対にいけない。  
そして、医療の不確実性や限界を認識した上で、最終的に自分自身で治療方法を決定する。  
治療後の経過などを医師に伝えるのも大事なコミュニケーションの一つだ。  
患者同士がもっともっと情報交換をし「賢い患者」になって、今後も楽しく健康な人生を送ることができる、そんな場として友の会が発展していけばいいと思う。

# TOYOHASHI HEART CENTER



3月27日 豊橋ハートセンター ハートホールにて

ハートええじゃないか友の会 講演会より

## あなたの心臓の 血管の中の世界



豊橋ハートセンター 循環器内科医長 **那須賢哉**  
な す けん や

狭心症、心筋梗塞が起きてしまう原因はすべて動脈硬化によるものです。動脈硬化は老化現象なので、どんなに健康な人でも必ず起きており、赤ちゃんの時からすでに始まっています。動脈硬化によって傷付いた血管の内壁にプラークが溜まりだすと、その部分が徐々に膨らみ始めます。膨らんだ内壁の厚さが65ミクロン(1000分の65ミリ)以下になると、壁が破れて中に溜まっていたプラークが血管内に流れ出てしまいます。プラークと血液が混ざると血栓ができ、それが心筋梗塞の元となります。

そうになってしまう前に、血管内の状態を調べる必要があります。まず造影剤を用いた検査を行います。造影検査は「影絵」のようなもので、血管の細くなっている部分はわかりますが、血管の壁の中の状態までは、はっきりと把握することができません。

そこで更に詳しく調べるために、血管内超音波という機械を使います。この検査では輪切りにした血管が画像化されるので、プラークの状態はもちろん、本当の血管の太さがどのくらいあるかなど、細部までを「虫眼鏡」のように見ることが出来ます。従って、治療にあたっての風船やステントのサイズを決める際にも使用しています。血管内超音波の検査は、世界中で唯一日本だけが保険適応となっています。

また最新式のOCTという機械では、近赤外線を使って10ミクロンという「顕微鏡」レベルの検査も実現しています。OCTは、主にステントによる術後の血管の状態が、血栓ができやすいものになっていないか、再狭窄が起こっていないかなどをチェックするために用いられています。今後のお薬の処方はどうするかなど、患者様の経過を将来にわたって評価するのに、非常に役立っています。

上記のように、医療の技術は日々進歩していますが、何よりも患者様ご自身の生活習慣を改善していただくことが大切です。動脈硬化を進行させる危険因子である高血圧・高コレステロール・喫煙・糖尿病の予防に努めていただきたいと思います。



# ハートインフォメーション

## 患者と病院が協力してより良い医療を!



満足できる医療は、患者と病院とが協力して作り上げるものです。

3月27日に豊橋ハートセンターで実施された『ハートええじゃないか友の会』講演会では、「みんなで話そう 患者が満足できる病院」をテーマに、いろいろな意見交換が行われました。具体的な質問には、加藤顧問が丁寧に答えてくださいました。

**Q. 予約をいれて診察を受けに来ているはずなのに、随分と待たされることがありますが、それはどうしてですか?**

**A.** 理由は大きく分けて3つあります。1つはドクターの診察には個人差があるという点。病気の診察以外にも、患者様の病気についての相談事などを聞いていて時間がかかっている場合もあります。2つ目は循環器に特化した病院ゆえに、緊急を要する患者様を最優先している、という点。3つめは患者様の増加、という点です。改正が可能な問題点は、予約枠が適正であるように常に見直しをするなど、スタッフが一丸となって直していこうと努力しておりますので、他にもご不満な点があれば遠慮なくお伝えください。

**Q. かつては1ヶ月に1度の診察だったのに、今では2、3ヶ月に1度の診察になりました。診察の回数が減ると真剣に考えてもらえていないのだろうか、と心配になります。**

**A.** 医師は患者様それぞれの病状、処方した薬の効用などを考えたうえで診察の回数を決めていますので、診察の回数が減ったからといって、真剣に考えていない訳ではありません。診察の回数が減ったということは、それだけ症状が落ち着いたという証拠でしょう。なお、豊橋ハートセンターは24時間体制で患者様の受け入れを行っていますので、お加減が悪くなられた時やご心配に思われた時は次の診察予約など関係なくいつでもご連絡下さい。



加藤顧問

いつでも患者様のご意見・ご質問等をいただけるよう、受付にご意見箱を設置しております。頂戴したご意見は、必ず医師・スタッフに伝え、対応させていただくようにしております。ぜひご利用ください。今後も活発に意見交換をし、より良い医療を実現しましょう。



### 豊橋ハートセンターが **森のある病院** に! 「森の精」 栃久保 操

森は、命の泉を授けてくれる大切なテーマです。太陽を中心に、月や星、虫や鳥、草や木、水や風、「生きとし生ける」あらゆる生物が自由を謳歌し、時を超えて宇宙がひとつになることを願っています。少年の日の森が、ふたたび蘇ってくる日を夢みながら、森の精が誕生しました。



玄関にあるこの不思議な森を眺めよう。  
きっと何かが見えてきて心が癒されるよ。

豊橋ハートセンター  
ハートギャラリーのご案内

◆ 5月7日～6月30日  
水野賢二・透明水彩画展

### 豊橋ハートセンターから 講習会等のお知らせ

〈会場〉豊橋ハートセンター 1Fハートホール

栄養教室 参加費: 無料

5月25日(月) ◎ 10:30～12:00

「糖尿病の食事について」

試食品を  
ご用意して  
おります!



救急蘇生講習会

6月20日(土) ◎ 10:00～12:00

救急蘇生法とAEDの使い方を身につけよう!  
参加費: 無料・事前予約は必要ありません。

どなたさまでもご参加頂  
けます。ご家族さま、ご近  
所さまとお誘い合わせで  
お越しください。



以降の実施予定 7月18日(土)

お申し込み・お問い合わせ

ハートええじゃないか友の会事務局

Tel. 0532-37-8910

9:00am ▶ 5:00pm (土・日・祝日を除く)

〒441-8530 愛知県豊橋市大山町五分取21-1  
豊橋ハートセンター内

E-mail. tomo@heart-center.or.jp

ロゴマークデザイン: 栃久保操 会報誌デザイン: 小林厚子